

「原子カムラ」の境界を越えるためのコミュニケーション・フィールドの試行

第4回業務推進全体会合

逐語録

(木村^浩) それでは、第4回業務推進全体会合を始めます。最後の会議になりますので、今までの振り返りをしたいと思います。

まずは資料に番号を振っていききたいと思います。最初は議事次第です。4-0でお願いします。次は、前回の議事録案です。4-1でお願いします。次に、シンポジウムの資料が4部続きます。「プロジェクトの目的・手法・枠組み」が4-2、「市民と専門家の意識調査」が4-3、「コミュニケーション・フィールド『フォーラム』の効果」が4-4、『フォーラム』の社会実装に向けて」が4-5になります。そして、シンポジウムに対するコメントをまとめたものが4-6です。次に、このプロジェクトの3年分の業務計画書から一部抜粋したものがあります。4-7でお願いします。参考までにおつけしていますが、平成24年度の成果報告書(要約版)が4-8、平成25年度成果概略が4-9です。次に、日本原子力学会2015年春の年会の企画セッション提案書が4-10です。その後に、3枚の講演の要旨があります。土田先生のものが4-11、竹中君のものが4-12、私のものが4-13でお願いします。最後に、報告書の目次案が4-14、本文記述例が4-15になります。よろしいでしょうか？

それでは、早速議事に入りたいと思います。

まず、議事録案ですけれども、すでに皆さんにメールでお返しして、特に修正のコメントが来ていませんので、大きな問題がなければ、これで確定としたいと思います。前回は、シンポジウムの前日ということもあって、アンケートの分析結果、インタビューの分析結果について議論したということになります。

1. 全体の振り返り

(木村^浩) それでは、全体を振り返っていききたいと思います。

シンポジウムの話については、時間が余る限り行うということで、先送りにして、先に業務計画を確認したいと思います。資料4-7、4-14、4-15をご用意ください。

4-7は、業務計画書です。このプロジェクトではこういうことをやりますと整理して、年度初めに文部科学省に提出するわけですが、その中から、具体的な実施項目に関する部分を抜き出したものが4-7になります。プロジェクトはこの内容に沿って粛々と行われていますので、4-7を通して、全体の振り返りができるかと思います。

まず、平成24年度(初年度)は、10月から始まりましたが、(1)社会調査の実施、それから、(2)フォーラムの設計を行いました。年が明けて1月に社会調査を実施し、

それを受けてフォーラムの設計をした、ということになります。その前には、コミュニケーション・フィールドの関連研究整理を行っていました。そして、フォーラム参加者を決定して、年度を終えています。

平成 25 年度は、第 1 期フォーラムを実施しました。5 月から 7 月の間に第 1 期のフォーラムを実施し、アンケートによる効果測定、インタビューによる効果測定を行って、フォーラムの再設計をして、第 2 期フォーラムに向けて、このプロジェクトとしては 2 回目の社会調査を行った、ということになります。

そして、今年度は、5 月から 7 月の間に第 2 期のフォーラムを実施し、同じようにアンケートによる分析、インタビューと記録による効果検証を行いました。なお、最終年度ということもあって、また、PO の岩田先生とのディスカッションもあって、今年度はまとめて代えて、フォーラムのシステム化の検討を進めているということになります。

シンポジウムは、2 回行いました。平成 25 年度は、フォーラムが終わって、約 2 か月後にシンポジウムを開いています。今年度は、全体の成果の取りまとめも含めて、12 月末に執り行ったということになります。

また、フォーラム、シンポジウムの記録は、全てホームページに公開しています。

今後ホームページに公開すべきものは、第 3 回全体会合の議事録と、今回の議事録と、来週の月曜日の外部評価委員の議事録です。これらの議事録を公開すると、成果としては全て達成したということになります。

次に、今年度の報告書について説明したいと思います。まだ問い合わせ中なのですが、今年度の実施内容を示すとともに、3 年間分もまとめなさいという指示が来ていて、苦心しているところです。基本的には、研究の流れをベースに組み立てようと考えています。

資料 4-14 が報告書の目次案です。3 章の「業務の実施内容及び成果」を見ていただければと思いますが、「コミュニケーション・フィールドの関連研究整理」から始まり、「フォーラムの準備」（フォーラムの設計、調査の設計と実施、フォーラム参加者の決定）、「フォーラムの試行」、「フォーラムの効果検証」（継続的意識調査による効果検証、インタビューとフォーラム記録による効果検証）、最後に、「フォーラムのシステム化の検討」という流れになります。

実際のプロジェクトは、「フォーラムの準備」から「フォーラムの効果検証」までを 2 回行っているのですが、報告書にまとめるのが難しいのですが、こういった形で記載したいと考えています。

それなので、報告書の本文（資料 4-15）は、最初に本業務の全体計画を並べて、その中に、各年度の業務計画書の番号を振って対応づける、という書き方をしています。例えば、「(1) コミュニケーション・フィールドの関連研究整理」は、平成 24 年度業務計画の「(2) フォーラムの設計①コミュニケーション・フィールドの関連研究整理」に相当する、というように、全て紐づけて、全ての業務内容がこの中に含まれています、ということを示す

ように気を使っています。

ちなみに、報告書はドラフト版が4月中旬提出ということなので、今年度が終わった後もお時間をいただくことになるかと思えますけれども、よろしくお願いします。

ここまでに、ご質問はございますか？ それでは、こちらはこれで終わりにしたいと思えます。

次に、学会に関する事柄について、確認したいと思えます。資料4-10からの4枚をご用意ください。

今回の学会では、委員会セッションということで、社会・環境部会と共催で、このプロジェクトに関する報告を行うことになっています。2015年3月20日の16:20~17:50に、A会場で行いますので、よろしくお願いします。

セッションのタイトルは、最初は研究タイトルを書いていたのですが、分かりやすくしてくださいということで、「市民と専門家のギャップを越えるために ~『フォーラム』の取り組み~」というタイトルをしています。

座長は諸葛先生にお願いしています。

講演は3件登録していて、1件目が土田先生の「福島事故後における市民と専門家の認識のギャップ」、2件目が竹中君の「『フォーラム』の試みと成果」、3件目は私から「コミュニケーション・システムとしての展望」について話す、ということになります。

実際のスケジュールは、最初に諸葛先生に、座長ということで開会のあいさつと、セッション全体の構造をお話しいただく。次に、私から、どういう目的のプロジェクトだったのか、導入したいと思えます。ここまで10分間程度で、質疑なしでやりたいと思えます。次に、土田先生が講演20分、質疑5分(16:30~16:55)。ですが、土田先生は関西大学の卒業式に出席しなければならないということで、神崎さんに代わりに発表していただくことになります。次に、竹中君が講演25分、質疑5分(16:55~17:25)。3件目に、私が15分話して、質疑5分(17:25~17:45)。私の講演の質疑5分は、私のプレゼンだけでなく、全体に関する質疑も兼ねようと思っています。そして、最後に諸葛先生にまとめのコメントをいただいて、終わりにしたいと思えます。いかがでしょうか？

—— A会場は、この後にセッションがないから、

(木村^浩) 若干伸びても大丈夫でしょうか(笑)。そうしたら、私の講演まではしっかりと時間を守るようにしましょう。最後の5分の質疑は、全体に関する質問も受けます。ここは諸葛先生の裁量でお願いします。

—— 同じ時間帯に別会場で理事会セッションが行われています。今回は少し派手で、理事会のあるべき姿を議論した後に、マスコミや地元の方を集めて、学会はこうあるべきだ

というセッションがあります。少し来る人が分散するかもしれません。

(木村_浩) 分かりました。

あと、資料はどうでしょうか？ 準備しておいたほうがいいですか？ 人数の予想が難しいですが。

—— 昨年の秋の大会で、私は 200 部用意して、100 弱余ったのは受付に置いておいたら、全部さばけました。用意するなら 100 分はあったほうが良いと思います。

—— A 会場の 1 つ前のセッションが廃炉委員会のセッションで、人が集まりそうな気がするから、我々のセッションにも人が集まりそうな気がします。

(木村_浩) 前回話したときも、会場がかなり埋まっていたからね。最低でも 100 部は必要でしょうか。

—— 100 は超えると思います。

(土田) 150、重くなければ 200 部持っていったらどうですか。

(木村_浩) では、準備したほうがよさそうなので、150 部から 200 部程度で配布資料を作りたいと思います。

それでは、シンポジウムの内容について議論していきたいと思います。1 時間半あるので、しっかり話せるかなと思います。

まず、資料 4-2 ですけれども、これは何回もお話ししているので簡単に済ませて、4-3、4-4 についてしっかり紹介してもらって、ディスカッションをしたほうが良いかと思います。

4-2 では、この研究の目的を話しています。

スライド 8 にフォーラムの目指すものを掲げています。「お互いが何らかの思い込みをして、お互いの考え方にギャップが広がった結果、コミュニケーションの不全と不信の悪循環を招いているのではないか」という仮説。この仮説に関しては、参加者へのインタビューなどから、実際にそうであったということが言えると思います。これに対し、フォーラムでの対話を通じて、市民と専門家がお互いを尊重し、コミュニケーションできるようになることを目指していますと。そして、フォーラムの実施について簡単な概略を示して、土田先生につながりました。

では、土田先生から、資料 4-3 について細かく話していただいて、ディスカッションしていきたいと思います。基本的には、第 2 期フォーラムの話ではなくて、第 1 期から通じた

話をしていますので、まとめだと思って聞いていただければと思います。

(土田) これからの話はシンポジウムで話したことですし、皆さんはもう聞き飽きているかもしれません。皆さんにお願いしたいのは、竹中さんのインタビューの分析結果と、意識調査の分析結果にどう整合性をつけるか、ということです。参加者がどういう状態だったのかということ、両方とも意味が通るように解釈する、ということが一番の目的になろうかと思っています。

それでは内容に移ります。2回調査を行いました。これは原子力学会が2007年、2008年から継続的に行っている調査をそのまま引き継いだという形になります。首都圏住民対象調査と原子力学会員対象調査は、基本的に同じ調査項目で、半数以上の質問項目は毎年継続して聞いています。例えばということで、2014年1月実施調査ではこういうことを聞きました、ということになります。

調査方法は、首都圏住民調査は、調査員がエリアを決めて、性・年齢別の割り当てに従って、20名を取ってくるという形で、500名回収しています。学会員調査は、学会員名簿から1400名を無作為抽出して、郵送調査をしています。毎年、550人から650人の回答が回収できているということになります。

毎年の調査の結果なのですが、基本的には首都圏住民と原子力学会員には、ほとんど正反対と言えるほどの大きなギャップがあります。ただし、これは福島事故以後です。福島事故前はそれほど大きくはありませんでした。

「原子力発電の安全を確保することは可能かどうか？」という質問ですが、学会員は可能だと思っています。赤色の、確信を持って可能だと思うという回答が、事故から時間が経つにつれて増えています。それに対して、首都圏住民は、確信を持って確保できないと思っている人が、時間が経つにつれて増えています。安全に関しては、ギャップが広がりつつあります。

次に、「原子力発電を利用していくべきか、やめるべきか？」という質問です。首都圏住民は、福島事故を境に、分布が正反対になっています。事故の直前は、利用に反対の人は14%しかなくて、半数近くは利用していきべきと答えていたのですが、事故後は、半数以上が、利用に反対しています。事故から年が経るにつれて、反対意見が減っていくということはまったく見えていません。事故直後の状態がそのまま維持されています。学会員は、元々ほぼ全員が「利用すべき」と答えていました。ごくわずかの人が反対していただけです。事故は学会員にも何らかのインパクトを与えたようで、それなりに反対する人は増えています。そんなに多くはありませんが。赤色の、自信を持って利用すべきと答えた人も少し減り、その後は元に戻っていません。時間が経つにつれて戻るのかと思いましたが、首都圏住民と同じで、誤差の範囲内で揺れはあるけれども、元に戻るという動きはありません。

次に、「原子力発電の利用は安心ですか、不安ですか？」という質問です。利用・廃止と

ほとんど同じ傾向を示しています。ただし、感情に関する質問なので、不安と回答する方は、廃止と回答する方よりも多くなっています。ですから、住民にも、怖いけどまあ使わなければ、と考えている人が一定数いることが分かります。でも、不安かどうかということだけ聞かれば、不安に決まっている、というのが首都圏住民のほとんど全てと言えます。学会員も、感情的な面では、安心がそれほど強固なものではありません。事故後、不安との回答が増えました。ただし、年度ごとに学会員の不安は減少傾向にあります。

次は、原子力発電と経済との関係性です。首都圏住民においては、「原子力発電がなくても経済発展できる」という意見が、年を経るごとに増えています。学会員も、原子力発電がなくても経済は大丈夫ではないかという意見が年々増えています。

ですから、全体の分布を見ると正反対と言えるのですが、事故後のトレンドを見ると、学会員と首都圏住民は似たトレンドを示しているものもある、という言い方もできるかもしれません。

次に、原子力に携わっている人・組織をどう思いますか、あるいは、どう思われていると思いますか、という質問です。

例えば、「原子力に携わっている人は、価値観や考え方が一般の人たちとずれている」という項目については、首都圏住民の約3割が肯定しています。2か年取りましたが、ほぼ安定しています。やはり、3分の1程度の住民はずれていると思っている。けれども、そうではないと答えている人も2割弱いますし、よく分からないという人もいます。それに対して、原子力学会員は、7割を超える人たちが、ずれていると見られていると思込んでいます。

「原子力に携わっている人たちに感謝している」という項目では、半分以上の首都圏住民は感謝していると答えているのですが、学会員の約3分の2は、感謝なんかされていないと思込んでいます。

10個ほど似たような質問をしたのですが、総じてこのような結果が出てきています。一般市民だけが原子カムラの壁を作っているわけではなく、実は学会員も原子カムラの壁を作っている、ということが示されているということになります。

ここまでが調査の内容ですが、次は、フォーラムの参加者はどのような意見を持っていたか、ということです。

まず、首都圏住民です。500名取っている調査の結果と、参加者とを比べるとどうなるか。「利用していくべきかどうか」は、ほぼ似ています。ただし、2013年のフォーラム参加者は、「どちらかといえばやめるべき」が少なく、「やめるべき」という意見が多いです。はっきりと「やめるべき」という意見が少し多いですが、だいたい分布は似ています。2014年の場合は、フォーラム参加者は少し「やめるべき」の方向にシフトしていると言わざるを得ません。母集団よりもやめるべきという意見が強い参加者になっています。

次に、「安心ですか、不安ですか？」という質問です。2013年の参加者は、少し不安側に

偏っていますが、分布はほぼ母集団と合っていました。2014年の参加者は、安心側の回答者がいませんでした。1人くらいいてくれれば、母集団と一致しているという言い方もできたのですが、「安心」と答えた人が1人もいないので、フォーラム参加者は不安側に若干偏っているということになります。

今度は、「原子力発電がなくても経済的に発展できると思うか？」です。2013年は、分布がほぼ一致しています。参加者は、「どちらともいえない」が少なく、はっきりと意見を持っている人が集まっていますけれども、分布としてはいい感じでした。2014年の場合も、やや「発展できない」という方向にずれていることは否定できないのですが、ちゃんと両側にいるとは言えます。以上が首都圏住民参加者でした。

学会員の場合、元々学会員の母集団自体がかなり偏っていますので、偏った答えしか出てきません。「利用すべきか？」と聞けば、「利用すべき」がほとんどです。

「安心か、不安か？」についても、母集団も安心側に偏っているし、参加者も偏っています。ただし、2014年の場合、フォーラム参加者の不安であるとの回答が多めであることが気になります。ですので、2014年の場合は、学会員においても、原子力利用に懐疑的な人が、母集団の分布よりも多くフォーラムに参加していたのではないかと、ということが伺えます。ただ、そうだと決めつけるほどのものではありません。

次に、経済的発展についてです。2013年は、分布がピッタリと合っていました。2014年の場合は、「発展できる」という意見も多いのですが、「発展できない」という意見も多いということで、誤差の範囲と言いたいところですが、若干注意が必要な分布になっています。

次に、フォーラム参加前と参加後の意見を見てみたいと思います。

ここでくどいほど強調したいのですが、サンプルは9名、または10名です。これで一般的な法則が表れていると言うつもりはまったくありません。たまたま、フォーラムをやったらこういう結果になりましたと。またフォーラムをやったら同じ結果が出るとは限りません。今回のフォーラムではこうでした、ということです。

まず、首都圏住民参加者は、フォーラムに参加したことで不安が軽減しました。2013年は、参加前は1.9とかなり不安度が高かったのですが、参加後は0.4ポイント安心側に移動しています。2014年は、0.8ポイント安心側に移動しています。ここが目に見える変化でした。したがって、首都圏住民参加者は、2回のフォーラムとも、フォーラムに参加したことによって、原子力利用の不安度は軽減した。「どちらともいえない」が3ですから、不安だということに変わりはないのですが、不安の程度が軽減しています。

次のスライドですが、首都圏住民参加者は、原子力参加者に対する好意度も増しているように見えます。2013年は、「人ではなく組織に問題がある」の肯定意見が増えています。「原子力に倫理的に問題がある」の肯定意見も増えています。2014年は、「原子力のことは専門家でなければわからない」、私たちには分からないのだという意見が増えています。そ

れから、「原子力に携わる人に好感を持っている」という意見も増えています。好意度が増したと言い切るには微妙な結果というのがフェアかもしれませんが、フォーラムに参加して、原子力関係者は悪い人たちじゃない。あの人たちが悪いのではなくて、組織が悪いのだろう。まあ、いい人たちじゃないか、というような印象を持ってもらえたのではないか、と伺える結果になっています。

原子力学会員参加者は、特に、2013年は劇的に変化しています。「感謝されている」と実感している人が、1.9ポイントも増えています。「大変な苦勞をしている」と思ってもらえているというのも1.5ポイント増えています。「好感を持たれている」は、2ポイント増えています。このように、2013年の学会員参加者は、我々は一般の人たちから排斥されていないと、フォーラムに参加したことによって非常に強く実感しています。2014年の場合はそれほど大きな変化はないのですが、「権力志向」だとは思われていない、「原子力のことは専門家でなければ分からない」と思われている、というような変化をしています。

次は事後調査です。フォーラムが全て終わった後、持ち帰って答えてもらった調査票で、原子カムラについて聞いていました。

まず、「原子カムラがあると思うか？」という質問です。2013年は、「境界があると思う」と答えたのは、学会員は2割程度、首都圏住民は6割程度でした。「どちらかといえば」まで含めると、9割の首都圏住民があると言っています。学会員も、ここまで含めると、約3分の2になります。ないとの回答は極めて少数です。2014年も、強弱はありますけれども、境界はあるというのがフォーラム後の感想です。

では、その境界を越えることができるかどうか、と聞くと、「越えることができる」が大多数になります。これは2013年も2014年も同じです。

すなわち、フォーラムに参加した後も、境界があるという認識を持っている。けれども、その境界は乗り越えることができる、という認識になっている、ということです。

このようなことを報告しようと思っています。

(木村^浩) ありがとうございます。ここまでで質問があればお願いします。

—— 「原子カムラはあると思うか？」という質問で、2013年の首都圏住民は「境界があると思う」が多い(60%)のですが、2014年の首都圏住民はぐっと落ちています(22.2%)。これはどうしてだとお考えですか？

(土田) 2014年の市民参加者の意見を見ると、「どちらかといえば境界はないと思う」が22%です。2013年は10%でした。つまり、2013年は1人だったのが、2014年は2人に増えた。それだけのことはあるのですが、元々数が少ないですから、1人が2人に増えたことは無視できないと思います。けれども、それ以外の方は、程度は変わっているのです

が、「境界はある」と言っています。となると、「境界はあると思う」と「どちらかといえば境界はあると思う」の移動をどう評価するかなのですが、これは、よく分かりません。

なぜこのような尻込みをしているかという、私は2014年のフォーラムを見ていないのです。2014年の参加者がどういう人たちなのか、よく分からないのです。私としては、数字しか解釈しようがないので。

—— 確かに、メンバーの雰囲気は違いました。ただ、2013年が60%に対して、2014年は22.2%というのは、大きく違う気がするのですけれども。

(土田) 2013年は、自信を持って「境界はある」とつけられたのでしょね。2014年は、原子力学会員参加者に原子力に反対の意識を持っている人がいたということで、自信を持って「境界はある」と答えられなくなった、のかもしれない。ただ、全般的に見ればあるじゃないかということで、「どちらかといえば境界はある」が増えたのかもしれない。

—— 参加者がもう少し多ければ。

(土田) そうなのです。せめて50人くらいいれば、まだ何か言えるのですが。

—— スライド22の、「原子力のことは専門家でなければわからない」という質問に関して、2013年と2014年で原子力学会員の傾向が違いますよね。2013年は、3.90から2.20に変化している。つまり、フォーラムに参加することによって肯定度が弱まっている。2014年は、2.63から3.63に、肯定度が高まっている。数字の問題なので、誤差の範囲かもしれませんが。

(土田) 2013年は、市民参加者でも、よく理解する人もいたし、分かっている人もいた。だから、学会員参加者は、ああ、一般の人でも分かる人が多いじゃないかと思った。だとすると、2014年は、分かろうとする市民参加者が少なかったのではないかと思います。数字を素直に読めば、そういうことだろうと解釈します。

(木村^浩) 2014年は、首都圏住民も肯定度が高まっているのですよね。

(土田) 2014年は、専門家参加者が小難しいことをいつもまくしたてて、市民参加者は、とてもついていけないと思ったのかもしれない。

—— そうですね。内容を追ってみないと分かりませんね。

(木村_浩) インタビューの結果から、何か解釈できそうなことはありますか？

(竹中) データから何か言うことは難しいと思います。

感覚的な話だと、市民参加者の理解しようとする態度の強弱は関係があるかもしれません。2013年の市民参加者は、原子力に対して興味があつて、知ろうという意識が比較的高かつたのかなど。それに対して、2014年の市民参加者は、2013年に比べ興味が少ない分、分からないことは分からないままでいいやと終わってしまつたことがあつたかもしれません。データから言えることではないですけども、そういう感じを受けました。

—— 2013年と2014年でかなり劇的に変わったのですね？

(竹中) ただ、その変わったということが、数値的にアンケートからも出てこないですし、インタビューからもうまく言えないので、困っています。

他の皆さんはどうですか？ 私は見えてそういう印象を受けたのですけれども。

(木村_浩) 端的なのは、2014年のほうが、市民の関心が落ちているのですよね。

—— あまり食いついていかないタイプの人が多かつたと思います。

—— 話がかみ合わなかつたのですか？

—— いや、そうではなくて、「ふーん」っていう感じでさらっと流してしまう方が多かつたように思います。

(土田) それはよく分かります。原子力のことを考えたくないのでしょう。

—— でも、フォーラムに参加したわけでしょう？

(土田) フォーラムには参加したけれども、こんなことは専門家に任せればいいと。私たちの問題ではないと。

—— 2014年は、突き詰めていくタイプの人が多かつた気はします。

—— 市民がそういう態度をとつたから、学会員もそれにつられて変わったということですか？

(土田) 学会員参加者も市民参加者のことをよく見ていたということでしょう。もう少し理解してくれるのかと思っていたら、全然理解してくれないし、関心も示してくれない。その結果、原子力のことは専門家でないといけないのかなという認識を、学会員が持ってしまった。

(木村_浩) 今の話は、専門家と市民の相互作用によってお互いに変化したということなので、面白いのですけれども、なかなか証拠を持って言うことが難しいのですね。状況的にこうなのではないか、という推測になってしまっただけ。

(土田) 2014年は、市民の関心が低かった。それから、初期の態度の分布も少し偏っていた。市民も学会員も、フォーラム後に「原子力のことは専門家でなければわからない」という方向に動いていた。ということと併せると、今言ったような「お話」ができる、というくらいでしょうか。

—— あとは、2013年は事故の直後だったから、原子力学会員が少し委縮していたということはないですか？ 委縮して、謙虚になっていたとか。

(土田) 時代的に言うと、安倍政権が変わって、原子力は政治の世界では受け入れられる方向に徐々に動いてきた時代ですから、それほど気にしない学会員が増えてきているというのが流れではあると思います。それで、2014年は、ということだけでも…。

(木村_浩) 2013年の学会員参加者の事前アンケートと、2014年の学会員参加者の事前アンケートを比較して、大きな差があるところがありますか？

(土田) いや、前に言いました通り、原子力学会員は、原子力に関しては、元々偏った意見の人たちなのです。

ただ、やはり特筆すべきは、2014年は、「原子力を利用していくべきだと考えますか、やめるべきだと考えますか？」という質問に、積極的に「やめるべき」と答えた極端な方が1人混ざっている。9人のうちの1人ですから、フォーラムの中で無視できない動きをしたんだろうと思います。

—— 専門家参加者同士の対立もありました。

(木村_浩) 考えるにはパラメータを入れすぎてしまった感がありますね。

(土田) そうですね。これは根拠を持って言えることではないのだけれども、こういう

フォーラムで、専門家が一枚岩でないと、住民は混乱するのだらうと思います。専門家同士で議論を始めると、

—— だからこそ、市民は突き詰めなかったのだと思います。静観してしまうというか。

—— 逆に、専門家の意見があまりにも一致していることを不気味に思うこともあると思うのですが。フォーラム参加者が、「違う意見を持った人がいるのだな」という感想を持った、という話が前にありましたよね。その「違う意見を持った」ということを好意的に取るか、逆に取るかは、見方によりますけれども、今回は、「違う意見」が極端すぎたということでしょうか。

—— 話題を変えてもいいですか？ 調査の結果を見ると、事故後は復調するかと思いきやそうでもなくて、株式市場で言うもみ合い状態が続いています。これは新聞の世論調査と一致していますから、この調査の信頼性は高いと思います。

それから、「原子力の安全を確保することは可能であると思う」という質問で、学会員の赤色（強い肯定）の意見がじわじわ増えています。私が新聞記者なら、「原子カムラびと、安全神話回帰の傾向くつきり」という見出しで記事を書くと思います。そういうリアクションがあるということは、心づもりをしておいたほうがいいと思います。

（木村^浩） 確かに、学会でぶら下がり取材があるかもしれません。

—— もちろん、次のページを見ると、原子力利用を反対する人が微増していますけど、そんなものは誤差ですから。このグラフは38%から57%まで増えていますから、そういうふうに書かれる可能性を心に留めておいたほうがいいと思います。

—— マスコミからすればそういう記事にする絶好のネタかもしれないけれども、純科学的に見ても、この結果は妥当だと思います。

安全という指標はないわけだから、リスクをどれだけ減らせるかということで判断することになります。学会員は、事故を起こしたから自信をなくしたわけですが、その後リスクを潰す手立てがそれなりに講じられてきて、リスクは減ってきたということを科学的に理解してきたと。だけど、首都圏住民の結果から分かるように、一般市民にはそれがまったく伝わっていない。リスクが減ってきているということが分からないわけです。学会員は情報が身近にあるので、それが見えてきている、ということだと思います。それを安全神話復活言ってしまうと、そうなのかもしれないけれども。

—— それがぶら下がりの模範解答だと思います。そういう質問があつたら、ぜひそうお

答えいただければと思います。

(土田) あと、記者に聞く耳があれば、「経済発展」と「利用一廃止」の結果から言うと、原子力学会員のほうも、原子力発電がなくても大丈夫という人が増えているし、利用していくべきという意見が事故直後に減って、そのまま留まっています。やめてもいいという意見が増えているけれども、安全だという意見が増えているということは、動かすという目的のために安全だと言っているわけではない、と理解してもらいたいですね。

—— スライドが追加できるのであれば、20年後に最も多いと思う発電方法、という質問を入れればいいと思います。原子力学会員は、原子力発電が一番多い、という意見がはっきりと減っていますから、土田先生が今おっしゃったことが裏づけられると思います。

それから、学会員はリスクが減ったことを理解して安全と判断している、というお話がありました。そういった正しい理屈で判断している学会員ばかりではないと思います。学会員が根拠を持って判断している、と言い切れるだけのデータではないと思います。

—— アベノミクスで安定電源に位置づけられたから、これでまた飯を食えると。

—— はい。人間の根拠というのは、理由が原因にならないのです。逆転することが多いので。

(木村^浩) そうしたら、竹中君から4-4の内容を紹介してもらってから、またディスカッションしたいと思います。お願いします。

(竹中) 資料4-4も、今までに何度も話していることなので、おさらいになると思います。この発表は、2013年と2014年を一緒にして、フォーラムはこういう効果がありますということを書いていますけれども、細かく見ていくと、2013年と2014年で違うところがあります。その違うところを口頭で付け足しながらお話ししたいと思います。

まず、スライド4のお互いのイメージについてです。ここは2013年と2014年で少し違いがありました。市民の専門家に対するイメージのほうで、市民を見下ろす、本音を話さない、無責任というような、不信感につながるようなイメージは、主に2013年に聞かれています。2014年のインタビューの内容を見ると、難しいことを言う、気難しい、議論ができないのではないかと、といった意見はありますが、不信につながるような悪いイメージの言葉はあまりありませんでした。

ここに関して、資料4-2のスライド3を見ていただきたいのですが、「原子力の専門家」の信頼が欠如していると書かれています。確かに、他の対象と比較すると信頼が欠如しているのですけれども、一番多いのは「どちらともいえない」という意見で、実は、不信が

非常に強いわけではないのです。

この質問について、2014年の市民参加者の意見分布は、「信頼している」が1人、「どちらかといえば信頼している」が2人、「どちらともいえない」が4人、「どちらかといえば信頼していない」が0人、「信頼していない」が2人でした。そういう意味では、母集団の分布とあまり変わらないのですけれども、この質問は新しく追加されたものなので、2013年はデータが取れていません。比較ができないので難しいのですけれども、インタビューで聞いている限りでは、2013年は原子力専門家への不信感がかなり強く出てきたのですけれども、2014年はあまり出てきませんでした。

(土田) 2013年の母集団はどうだったのでしょうかね。ただ、「原子力の専門家」とその上の「インターネット」は、分布がほとんど変わりません。だから、「原子力の専門家」に対する不信は、「インターネット」に対する不信と同程度だと言えます。このくらいの分布だと、1年でそんなに移動しているとは思えないのですが。

(竹中) 母集団の分布は変動していないと仮定しても、2013年の参加者がどう分布していたかは見ることはできません。

(土田) それは分かりません。2013年の参加者は、信頼に関しては偏っていた可能性もあります。

(木村^浩) 「原子力に携わる人たちの安全確保に対する意識や努力を信頼している」という質問はどうですか？ 代わりになりませんか？

(竹中) その数字も一応見たのですけれども、それほど変わりません。

(土田) 「信頼」という言葉は、アンケートをするとき、日本語として難しいのですよ。「感謝しますか？」と聞けば、感謝していますと答えるのですけれども、「信頼していますか？」と聞かれたら、どう答えたらいいか分からなくなるのが本当のところだと思います。トラストという英語の訳語が、調査する側の頭にこびりついているものだから、当たり前という言葉に思うのだけれども、答える側にしてみれば、信頼していますかという質問は無茶な質問かもしれない。

—— 「学校の先生を信頼していますか？」だったら、日常の行動と結びつくから、イメージできますけれども、原子力の専門家と何の接点もない人に、「原子力の専門家を信頼していますか？」と聞いても、答えるのは難しいでしょうね。

(土田) ええ。具体的に何を聞かれているのか、どういう行為を指しているのか分からないと思います。

—— だからこそ、出会った人によって開きがあるということですね。

—— そうですね。質問された人が、何をイメージして答えるか。テレビに出てきた田中規制委員長ぐらいしか思いつかないのではないのでしょうか。

(木村_浩) ここに関して、2014年のフォーラム前後の調査結果はどうなっていますか？信頼側に寄ったのか、どうなのか。

(竹中) インタビューからは、信頼側に寄っているのは明らかですが。

(土田) 見てみましょうか。時間がかかりますが(PCでデータを探す)

(木村_浩) では、その間に、発表の続きをお願いします。

(竹中) はい。今度は専門家の市民に対するイメージですが、こちらは2013年と2014年で違いはありません。ただ、市民から糾弾されるかもしれない、というような恐怖感は、2014年のほうが少なかったと言えます。

—— やはり委縮していたのですね。

(竹中) 2013年は、参加前は恐ろしかった、というコメントが出てきました。ただ、2014年も、いくつかは聞かれました。

スライド5は、こういったイメージがどう変わったか、ということをもとめています。こういった思い込みや先入観は、第1回フォーラムから解消が始まっています。自己紹介を聞いたり、実際に顔を見て話してみたりすることで、ああ、イメージしていた人とは少し違うなということが分かっていく、ということです。その中で、議論できる、ということをも市民も専門家も思う、ということです。

スライド7に、「お互いに理解し、尊重する」という変化を書いています。ここについては、2013年と2014年に大きな違いはありません。市民は、専門家にもいろいろな人がいて、いろいろな考えがある、専門家を1人の人として見ないといけない、というようなことを思う。「共通点を知る」という点では、専門家にも自分たち市民と同じ意識、意見を持っているところがある、同じ人間だと気づく、ということが聞かれます。一方で、「お互いが異なることを知る」という点では、やはり専門家と市民は違うところは違うという意見

が聞かれます。

(木村^浩) 先ほどの土田先生の資料だと、「原子力のことは専門家でなければわからない」というところで少し差が出てきているけれども、「共通点を知る」「お互いに異なることを知る」の程度が、2013年と2014年で異なっている、というようなことはありますか？

(竹中) そういう違いを知った後に、じゃあ自分がどうするか、というところで差が出てきている印象は受けました。「異なることを知る」や「共通点を知る」は、2013年も2014年も同じようなコメントでした。

—— 2013年の市民参加者のほうが、専門家に任せられないという意見が多かったから、専門家が信頼できない、自分たちでも何かしなければいけないという意識を持っていたと。2014年の市民参加者は、専門家はある程度信じられる、自分たちはあまり関与しなくてもいい、という意見を持っていた人が多かったのでしょうか。そういう理解は行き過ぎですか？ 信頼できて、専門家に任せていいのだったら、ムラがあってもいいわけですよ。信頼できなくて、任せていけないから、ムラがあってはいけないという話になるのですよね。

(竹中) そうですね。

ただ、2014年の市民参加者は、不信の程度が弱いだけで、「信頼できる」とまでは言っていない。先ほども言ったように、分布としては、信頼側が3人、どちらともいえないが4人、信頼できない側が2人なので。それに、専門家に任せていいと思っている、とは言いきれないですね。

—— 2014年の市民参加者は、ムラがあってもいい、というよりも、ムラがあっても仕方がない、という受け止め方をしていたように思います。自分たちでは分かりきらない部分があるから、専門家としてのムラがあっても、それは仕方がない、という感じで。だから、2014年は、「ムラ」をあまり悪いイメージで捉えていなかったと思います。

—— 「ムラって何ですか？」という人もいましたね。

(木村^浩) ただ、ムラの認識度は、2014年のほうが高かったと思います。2013年は、ムラという言葉聞いたことなかった、という意見が多かったです。

—— 2014年の参加者は、2013年のフォーラムの記録がホームページに載っていたから、ムラについて事前勉強ができたのではないのでしょうか。2013年の参加者は、事前勉強がほ

とんどできなかった。その違いは大きい気がします。

—— 去年の記録を見た、とおっしゃっていましたからね。

(木村_浩) すみません、時間が残り少なくなってきたので、続きを聞きましょう。

(竹中) 次はスライド 10 です。「お互いに理解し、尊重する」というステップで、専門家がどのような変化をしたかをまとめています。専門家も、市民にもいろいろな人がいると言っています。ただし、市民に理解してもらうのが自分たちの仕事で、市民を、理解してくれるか、理解してくれないか、みたいな見方で見ている専門家もある程度見られました。「共通点を知る」「お互いが異なることを知る」に関しては、市民と同じように、同じ問題意識や意見を持っている、考え方が違うところがあるということ、専門家側も思っていました。専門家の変化は、2013 年と 2014 年であまり違いはありません。

スライド 11 では、3 回程度のフォーラムで、多くの参加者が、「お互いに理解し、尊重する」というステップまで到達する、と言っているのですけれども、いわゆる毎回の事後アンケートの変化を見ると、意見が大きく変わるタイミングは、2013 年も 2014 年も宿題の回なのです。第 1 期の宿題は、第 4 回にありました。第 4 回のアンケートで、参加者の意見が大きく変化しています。第 2 期は第 3 回に行いました。やはり第 3 回のアンケートで変化が起きています。第 1 期は 3 回フォーラムを行って、やっと宿題ができる状態になったと判断しての第 4 回だったのですが、第 2 期は第 2 回まででその下地ができあがっていた可能性があります。

(木村_浩) 下地が早くできた理由は何だと思えますか？

(竹中) 2014 年は、市民参加者の原子力専門家に対する不信が少なかったもので、先入観が解けるまでにかかる時間が短かったのではないかと、思います。

—— 今の話は、宿題を出したことによって、参加者がいろいろ考えたから、意見が変わったということですか？

(竹中) 参加者の方の話を見ると、宿題の回で、いろいろな人の意見が初めてしっかり分かりました、という意見が多いです。議論の中だと見えてこないことが、1 人 1 人がしっかり資料を作って持ってくることによって、よく分かったみたいです。

—— ということは、人の意見をしっかり聞くと、変化が起こる可能性があるということですか？

(竹中) そうですね。

—— そちらなのか、じっくり考えたからなのか、どちらの効果でしょうか？

—— 自分が一生懸命考えたことを他の人がどう評価するかということも含めて、人の意見を聞くことができた、というのが大きかったのではないのでしょうか。

(竹中) そうですね。宿題の回では、自分の宿題に対するコメントを他の参加者からもらっていました。その一連の行為の中で、どこが一番効いていたのかは分かりません。もちろん、自分で宿題をやったことも大きいと思いますし。

—— ただ、人のコメントを聞くことが、他の人の意見を聞くことにつながったような気はします。

(竹中) そうですね。それをポイントとして挙げている人もいらっしゃいます。特に第1期はその傾向が強かったと思います。第2期は、市民と専門家が違う宿題をやってきていることもあって、同じように分析ができないので、難しいのですけれども。

—— 宿題の後は議論が活発だったような気がします。

(前参加者) 私は、2013年に市民側でフォーラムに出席していました。宿題を出されたときは、その前の3回のフォーラムのことを考えながら、宿題を書いたような気がするのです。自分の中で再確認させられたような気がするのです。

そして、宿題の回の当日は、自分の宿題に対するコメントもあったので、そこでまた意識が変わったと思います。

—— 単に「宿題」と言うだけでは、フォーラムを見ていない人には伝わらないと思いますから、学会で発表するときは、今出てきたような話もするべきだと思います。

—— スライドを1枚足してもいいくらい大切な話ですね。

実は、原子力学会の中でも、今、意見の多様性がとても重要だということを議論しています。単一の思考傾向の人だけだと、偏ってしまいますから。いろいろな人がいて、初めて議論が成立するので。

だけど、てんでんばらばらのことをやっても、なかなかまとまらない。宿題で同じテーマを与えて、スタートラインを揃えて、同じような時間をかけて資料を書いて、それ

を持ち寄って意見を交換する。そのプロセスに大きな意味があるような気がします。他のテーマで議論していると、スタートラインがそれぞれ違うわけです。だから、バックグラウンドの少ない人は話についていけなかつたりするけれども、宿題を与えられて、次回までに考えてきてくださいとやると、スタートラインが揃っているから、意見も交わしやすくなって、理解が深まる。これは非常に重要なことですね。

—— テーマも、皆で話し合っ、その中から選びました。そういうプロセスを踏んで、家に持ち帰って、自分の頭で考える。当日は、自分でもよく理解しながら話すことができ、コメントもいただく。このプロセスで、理解が深まったのだと思います。

—— そういう形で宿題を作ったということも、きちんと説明したほうがいいかもしれません。竹中さんの発表に入れたほうがいいのではないのでしょうか。盛りだくさんになりませんが。

(木村^浩) インタビューや観察によって、フォーラムでこういう現象が起こった、ということは整理されてきていると思います。ただ、その現象がなぜ起こったかは、あまりにパラメータが多いので、いくつかの推測ができるところで止まっています。こういうことが起こりうるかもしれない、という仮説は出てきているので、それを整理したほうがいいと思います。現象は現象として、こういうことが観察されました。そして、その現象に影響を与えると考えられるのは、この範囲です。この範囲の中で、こういうダイナミズムがはたらいていた可能性があります、までは言う。ただ、これらは検証していかないと分かりません、という整理はしておかないといけないのかもしれない。

例えば、時間経過によってお互いを見ることができるようになったのか、宿題というイベントがそうさせたのか、は分からない。だから、どちらかだと断定してはいけないですね。ただ、そのときに、こういうことが可能性としては考えられる、と並列できるようにしておいたほうがいいですね。

—— ただ、先ほど話があった、自分で宿題を書いて、人から話を聞いて、影響を受けるというのは事実ですよね？

(前参加者) 事実です。まったく何も知らない状態でフォーラムに入って、3回のフォーラムを経験して、宿題を書くときには、専門家に聞いた話を考えられるわけです。自分の中で確認させていただくという作業ができるわけです。

(木村^浩) それは、そういうことだということで、1つのケースとしてきちんと記述しておくべきことだと思います。

やはり、こういうシステムの評価って難しいですね。

—— でも、木村先生がおっしゃったように、仮説をたくさん挙げて、この次は、仮説を検証するというテーマにいけばいいわけですから。

(木村^浩) そうしないと駄目かなと。報告書でも、今後の展開についても書きなさいとあるので、現象の理由として考えうるものを整理しておいて、仮説検証という形で次につながられるのは強いと思うので、整理できるといいなと思っています。

すみません、あと 15 分で終わってしまうので、どうぞ続きを。

(竹中) スライド 12 は、そこから一歩先に進んで、「自分が変わってもよいと思う」、あるいは、「相手が変わろうとしていることを知る」というステップです。

市民が、「自分が変わってもよいと思う」ことは、大きく分けて 2 つあります。1 つは、原子力にもっと積極的に関わっていかねばいけないのではないかと、というような関わり方の話です。もう 1 つは、原子力に関する理解の仕方、ものの捉え方が成長しましたという話です。

こういうふうに書くと、皆がこの変化をしたように見えるのですが、実は「お互いが変わろうとして、コミュニケーションする」というステップまで到達している市民は、それほど多くありません。第 1 期は、3~4 人だと思います。第 2 期の市民参加者からは、こういった意見はほとんど出てきませんでした。これが、先ほど土田先生から見せていただいた、「原子力のことは専門家でないといけない」というところにつながっているのだと思います。

(土田) そうでしょうね。市民に、変わらなければいけない、という圧力がかかっていない。任せておけばいい、という方向に行ってしまったのでしょうか。

(竹中) そうですね。それが 2013 年と 2014 年の差だと思います。

一方で、専門家がどのように変わったかということ、専門家として説明しなければいけない、市民と会話する機会が重要だ、というような意見が聞かれます。こちらは、2013 年と 2014 年で違いがありませんでした。まあ、専門家は基本的にこういうことを言うので、変化と捉えるよりは、元々こういう考えを持っていたと捉えたほうがいいたろうと思っています。

スライド 14 は、どのようなきっかけで自分が変わろうと思ったか、ということをもとめた図です。専門家が変わろうと思ったきっかけは、市民がもっと専門家のことを知ろうと思ってきているし、原子力に対して積極的に関わろうとしているのを見て、自分たちももっとやらなければいけないと思った、というものです。市民も、同じように、専門家が

積極的に説明しようとしてくれるし、その説明もどんどんうまくなっていくのを見て、自身も変わっていく、というようなことがあります。

ただ、ひとつポイントとして、右下の点線で囲んである部分なのですけれども、専門家が自身の考えや主張、価値観を言ったとき、あとは専門家が苦労や悩みを言ったときに、市民に、ああ、なるほど、こういう専門家の考えはもっと理解していかないといけないというふうに、専門家を理解しようとする、という動きが出てきます。一方で、専門家から、もっと自分の価値観を話したほうがいいのか、苦労や悩みを伝えることは重要だということに気づきました、というようなコメントは出てきませんでした。なので、専門家がこの部分の重要性に気づいているかは疑問であるということを書いてあります。

(木村^浩) 第2期の市民参加者が大きく変わろうとしなかった、ということの理由のひとつは、ここにもあるのでしょうか？ 第2期の専門家参加者が、考えや主張、価値観をうまく伝えきれていなかったとか。

(竹中) そんなことはないと思います。というのは、第2期の市民参加者も、専門家のこういう話を聞いて、私ももっと専門家のことを理解しなければいけないと思った、とおっしゃっているからです。そういう意味で、第2期の専門家参加者が考えや主張、価値観を言っていないわけではないし、それが伝わっている市民の方もいるので、そこが差の原因ではないと私は思っています。

ただ、第2期でそういうことを言った市民の方は1人だけですけれども。

(木村^浩) そうすると、第2期の市民参加者が変わらなかった理由は、何なのでしょう。初期状態に依存しているのでしょうか。

(竹中) 初期状態なのか、その市民の方がうまくコミュニケーションをとったからなのか。

(木村^浩) その市民の方が、個人として、そういうことを聞き取ることができたから、変わることができたということですか？

(竹中) 例えば、懇親会の場で、たまたまその方だけがそういう情報を手に入れられたからかもしれないですし、初期状態がその方だけ違う状態にあったのかもしれないし。

(木村^浩) 確か、専門家が「事故の後、専門家だって悩んでいるのですよ」と言うのを聞いたから、と話していましたよね。それはグループワークの中での会話だから、同じグループにいた他の市民の人も聞いていたはず。でも、気づいたのは1人だけだったと。

だから、専門家の考えや主張、価値観を聞けば必ず変わるというわけではなくて、これが大きなきっかけになりうる、と読むべきなのでしょうね。

(竹中) そうですね。

—— 「専門家の考え、主張、価値観を伝える」というのは、市民からしてみたら、専門家の市民性を見たということですか？

(竹中) 「専門家も市民と同じなんだ」と感じるきっかけになるのは、どちらかというのと、「専門家の苦労や悩みを伝える」のほうです。

「専門家の考え、主張、価値観を伝える」のほうは、専門家は、情報は出したがるけど、その情報をどう解釈するか、自分がどう思っているかということはなかなか言わない。実は、それらを言うと市民の変容に結びつく、ということです。

—— でも、「専門家の価値観」となってくると、市民性になってきませんか？ 人生に対する価値観とか。

(竹中) 例えば、専門家の方が、「原子力というのはそんなに危ないものではないと解釈しています」という話をしたとします。これは「価値観を伝える」ことになりますが、市民と同じような価値観を持っているという話ではないと思います。市民は不安に思っている。ただ、そういう解釈を話してくれるということが役に立つということです。

—— コミュニケーション過程において、意見変容するときの一番の要素は、信頼だと思います。

信頼に関してはいろいろな先行研究があります。あえてブレイクダウンすると、能力と公正性と価値共有の3つに分けられると思います。

そのうちの公正性をさらにブレイクダウンすると、心理学者が言うには、自分にとって都合が悪いことをあえて相手に言うという姿勢は、相手の共感を得ると。例えば、不動産屋が家を紹介するときに、その家のいいところだけでなく、悪いところまで言ってしまうと、かえって信頼性が増す、ということです。

スライド14の「専門家の苦労や悩みを伝える」というのは、自分の弱みを見せているわけです。原子力のいいところだけでなく、実はこういうことで自分たちは悩んでいる、つまり、原子力の弱みを伝えている。そのことが、先ほどの話と一致すると思います。

—— 苦労や悩みについてはその通りだと思いますが、主張や価値観は何でしょうね。

(土田) 人によっては、開き直ったととられると思います。隠さないで自分の持っているものを言うのだから、ある意味で情報公開だし、それが信頼につながることもあるかもしれないけれども、でも、これは、反対している方の前で、大丈夫ですよということと同じでしょう。そうすると、人によっては開き直りとか、我々のことを何も考えていないととることだってあると思うのですけれども。

(木村^浩) 伝えることで、逆に相手のことを理解しようとしなくなってしまう可能性もあるということですか？

(土田) 本当に私はこう思っている、と言うことは、信頼につながるかもしれないけれども、それだけでいいというわけではなくて、プラスアルファで何かが要るような気がします。

(竹中) 確かに、「あの方が価値観や主張を言ってくれたことが自分の変化に効いています」という話の、相手の専門家は、限られた人たちでした。

(土田) おそらく、それ以前に、その専門家の人にすでに信頼を感じているのですよ。価値観、主張を伝えたから信頼できたのではなくて、信頼があるから、価値観、主張を言われても受け入れられるわけです。

(竹中) ただ、信頼を感じる要素のひとつに、「ここまでやってくれる（価値観や主張を伝えてくれる）」ということがあるのだと思います。

—— それは鶏と卵ですね。

(土田) うーん。言葉にならない何かがあるのだと思います。例えば、この人は頼ってもよさそう、とか。下世話なことと言うと、この人は見映えがいい、とか。

(木村^浩) たぶん、次のスライドにその辺りのことが書いてあるのだと思います。なので、解説してもらってもいいですか。

(竹中) スライド 15 には、専門家が、どうしたら信頼してもらえて、話を聞いてもらえるか、ということでポイントとして出てきたものを羅列しています。

1つ目が、市民の知りたいことを知ろうとして、それに答えようとする。相手に寄りそうということです。2つ目が、市民に分かりやすいように説明する。3つ目が、市民の考えに共感できる場所は、その意を示す。4つ目が、専門家として答えが出ない部分について、

その悩みや苦勞を伝える。5つ目が、専門家としてではなく、個人としての考えや主張、価値観を伝える。こういうことをしている人なら話を聞きたい、という意見が、市民参加者から聞かれたということになります。

(土田) 4つ目ですけれども、専門家にもいろいろな人がいます。例えば、第一線の研究者で、私の知らないことは人類の知らないこと、くらの専門家が、「分からないところがあって、苦勞しているのです」と言うなら分かります。でも、「知り合いの研究者がこんなことを言っていました。まだ答えは出ていないのですね。悩んでいます」と言われても、市民はそれで共感するのでしょうか。

(木村^浩) 今の話は、専門家とは何かという議論なので、ケースバイケースなのだと思います。例えば、市民のほうが強勉強していて、専門家のほうが中途半端なことを言うと、全然意味がない。相対的な距離感によると思います。

—— ここは確かに難しい問題だと思います。

例えば、お医者さんは、医学の専門的な話は科学的には約1割しか分かっていない。9割は分からない。だけど、患者として見たときに、「9割は分からないから」と正直に言う先生がいいと思うか。どっしり構えて「いや、全然心配ありませんよ、大丈夫ですよ」と言ってくれるほうがいいのか。私は、いかにも100%分かっているようなことを言うお医者さんのほうが、患者の信頼が厚いような気がします。

だけど、原子力の失敗は、何でも分かっていますと言い過ぎたところにあります。だから、今は正直に分かっていないこともあるのですよ、と言ったほうが、信頼が得られるのかもしれない。でも、これは解はないのだろうと思います。

—— 私は、専門家もできるだけその逡巡の過程を言うべきだと思っています。私も自分の中で裁判をやっていて、原子力のいいところと悪いところがずっとせめぎ合っているわけです。こんないいところがあるけれども、こんなまずいところもある。結果として、こちらのほうが少しましだろうと。その逡巡の過程を示すことこそが、私は誠実だと思っています。

ただ、程度問題なのですよね。全てが全て分からないと言うのではなくて、必要なところで小出しにするのが一番いいかなと思いますけれども。

(土田) 私は、それこそがリスクコミュニケーションだと言っているのですけれども。

—— 人によって、専門家に決定を委ねる人と、自分で考える人と、2通りあって。そして、その間に中間的な人がたくさんいますから、それもまたケースバイケースです。

(木村_浩) 「知りたいことを知ろうし、それに答えようとする」とありますが、その人が何を求めているのかも知ろうとするべきだ、と書いておくべきかもしれません。

(土田) 市民の知りたいことが階層になっているのですよね。とにかく最後の結論を知りたいのか、その結論を出すための材料を知りたいのか。いろいろな階層があるので、その階層が分かっているかどうか、ということも要ると思います。

(木村_浩) そろそろ時間になります。では、最後のスライドの説明をお願いします。

(竹中) 最後のスライドは、お互いに変容しているけれども、その変容は同じではないということを言っています。市民は、専門家のことを理解しようとしています。これに対して、専門家は、市民に専門家のほうに近づいてもらおうとしています。つまり、専門家は、自分たちが市民に近づいていこうとするのではなくて、市民に専門家のことを知ってもらおうと思う、ということです。お互いに近づくという変容ではないということをここでは言っています。

(木村_浩) ありがとうございます。議論は尽きないですが、時間になってしまいましたので、あとの資料に関して、私から簡単に説明したいと思います。

資料 4-5 は、「社会実装に向けて」ということで、システム化の議論です。1つは、フォーラムの要件の洗い出し、設計手順、限界をドキュメント化する。2つ目は、今まで出てきたような話を基にしっかり分析して、例えば専門家の要件のような知見を整理する。このような2本立てで社会への実装に向けて整理をしていきます、ということを書いています。

資料 4-6 は、シンポジウムの終了時に会場の皆さんからいただいたコメントを整理したものです。特に、提案的などころにはアンダーラインを引いています。今回は専門家、市民という枠組みだったが、様々なステークホルダーを巻き込んだ仕組みを設計してはどうか。グループダイナミクスの手法を取り入れて分析してはどうか。福島で活かせる部分があると思うので、そういうことを積極的に具体的に示してもいいのではないかと。専門家と市民の間ではなくて、政策者と市民の間に壁があるのではないかと。一般市民ではなくて、活動家の市民とのコミュニケーションはどうあるべきか。あとは、これはやろうと思っていますが、フォーラムのマニュアル化を願っていますと。いろいろな提案が出てきていましたので、こういうものも精査しながら、今後の展開として文章を書いていきたいと考えています。

ということで、駆け足ですが、よろしいでしょうか？

2. その他

(木村_浩) 皆様のご協力を得て、無事にいいところに着地できたと感じております。あとは、報告書をしっかりまとめて、できあがり次第、共有させていただきたいと思いますので、よろしく願いいたします。まずは、無事に終わりそうということで、皆さんにお礼を申し上げたいと思います。どうもありがとうございました。(拍手)

次の展開も考えていますので、そのときはまたよろしく願いします。社会調査に関しては、科研をチャレンジしているところです。何かあれば、引き続き研究を続けたいと思いますので、よろしく願いいたします。

それでは、本日の業務推進全体会合はこれで終わりにしたいと思います。どうもありがとうございました。

以上